

# 仏教寺院の地域開放とセツルメント

——佐伯祐正と光徳寺善隣館——

菊池正治

(西九州大学助教授)

## はじめに

日本近代における仏教は、封建的残滓の払拭への努力Ⅱ

近代仏教の確立への苦闘の歴史であった。仏教改革は、社会体制の変化にもなっておしすすめられたが、真の改革のポイントは、仏教者自身が近代社会と、そのなかでの仏教を客観的に認識し、そこから過去の遺制のうえに存立する封建仏教に対する自覚的・主体的な働きかけがない限り、それは脆弱なものとなってしまうであろう。近代仏教史研究が教えるものは、仏教改革と称されるものすべてが如上のような形ですすめられたというより、多くの場合その端緒は別にしても、その後の歴史展開のなかで自己保身

のための形式的改革に変質したり、あるいはまた、それが末端まで及ばなかったりして途中で挫折した事実を明示している。

仏教改革は、究極的には仏教教団の末端組織である末寺寺院が如何なる自覚性をもつか、その「質」に規定され、これに支えられる。近代社会では、形式的には個人の信仰が主張されるが、仏教は、現実的・実質的に厳然として寺院と檀家という「家」を媒介とする「信仰」集団として存在している。この問題を含む様々な封建的諸制度への自覚的批判こそが寺院住職に要求された。

激変する社会のなかで寺院住職が痛感したものは何であつたろうか。かつて自らの寺院が地域社会のなかにあつて

住民生活と密接に関係した「古き良き時代」を懐古したのか、それとも、社会の必然的な動向を敏感に会得して仏教・寺院の改革を志向したのか、それはさまざまな形態をもって存在していた。このなかで、寺院住職として社会事業の分野に進出していった人々の存在に注目する必要がある。これらは、積極的に社会のなかに仏教者として自分の存在を位置づけ、社会との関わりのなかで仏教と寺院の問題を真摯な姿勢でうけとめた人々であったと考える。それは、彼等が仏教信仰をもつ故の社会的行為であった。

この小論においては、仏教・寺院の活動対象を従来の檀家のみに限定することなく、広く地域社会の住民にまで拡大し、彼等の生活的・文化的向上を目標に、地域に根ざした寺院セツルメントを実践し、寺院の開放を通して近代仏教の在り方を模索し続けた佐伯祐正と彼の経営による光徳寺善隣館をとり上げ、二、三の問題についての検討を試みる。とりわけ、先行研究ではあまり注目されなかった佐伯の人物像と光徳寺善隣館での実践の検討は、この小論の主要テーマである。

## 一、佐伯祐正の仏教観とセツルメント思想

佐伯は、浄土真宗本願寺派房崎山光徳寺<sup>(1)</sup>（現・大阪市大淀区中津二丁目五番四号）にて一八九六年二月十四日に誕生している。父は、同寺第十四世住職の佐伯祐哲、母はタキ（後に八重野と改名<sup>(2)</sup>）と称し、同夫婦の間の四男三女の長男が祐正であった<sup>(2)</sup>。彼は幼名を豊丸といい、地元の小学校から京都の平安中学（現・平安高校）へ、さらに仏教大学（現・龍谷大学）へと進学して寺院後継者としてのごく普通の道を歩んでいる。祐正の弟にあたる祐三は、天才画家としてあまりに有名であるが三才の若さでバリにて客死している<sup>(3)</sup>。祐正も芸術方面への関心は高く、一度は、音楽方面への道に志をたてたものの父祐哲の死去後、光徳寺第十五世住職として法燈を継承している。この時の彼の心境は「これには（寺院継承のこと……引用者注記）あまり嫌な心持ちもなく寺院を無理に飛びださなければならぬ程の気も起らなかったと言ふのは、かつてある寺院と言ふものに自分はいるのではなく、自分が初めて自分の思ふ姿のものをこれから作るのだと言ふ気持<sup>(4)</sup>」があったと語っている。佐伯

の終生のテーマである仏教の現代化という命題は、この法燈継承時においてすでに意識化されていた。すなわち、仏教に対する一般の既成概念にとらわれることなく、佐伯自身が考える仏教・寺院観にもとづき、まず自分の足下から改革を試み、これを通して如上の命題を実践しようとする姿勢をもっていた。

「大正十一年の春京都の仏教大学の業を終へて社会に飛び出した自分は、父の死その他多くの人の死に逢って、頗る混乱した而も本気な青年らしい真面目さで色々のことを考へぬいた。それは生活のことであり亦宗教の事であった<sup>(5)</sup>」と若き青年時代に送った苦悩の日々の一端を自ら記している。宗教のことは、勿論、彼にとっては仏教のことである。「宗教は浄土のみを求めて人間苦、社会苦を慰めようとする。なぜ人間苦、社会苦と闘はせる勇気をつけないのか……人間が作って人間を苦めてゐるものに対して宗教はなぜ積極的に力とならないのか<sup>(6)</sup>」という仏教に対する素直な疑問と「血の湧き出る様な現実的、社会的<sup>(7)</sup>」な仏教への模索は、佐伯に限らず若き求道者にみられる共通の問題意識であつたと思われる。佐伯には、親鸞が、人間を

罪惡深重煩惱熾盛の衆生ととらえ、また、聖道門の慈悲では眞の衆生利益を見出すことはできないとした点などを「あまり人間を馬鹿にし現実を見くびり人間を見くびった言葉<sup>(8)</sup>」としてしか理解できなかった。このために伊藤証信の主宰する無我愛の憧憬者となったり、また、西田天香に傾倒したことなどもあつたようである。仏教に対する懷疑をもちつつ佐伯は住職としての道をえらび仏教の現代化という命題を自分自身に課すにいたる。そこでの彼の実践は、自分の住する寺院の地域社会への開放からはじめられているが、これを紹介する前に、彼の寺院観について今少し検討をなす。

佐伯は、寺院創設の歴史的経緯から、寺院は本来「公の家」であり「社会の家」であると認識した。この観点から現代の寺院は、住職がそれを私有化してしまつており宗教的社会的に利用していないと厳しく批判する。本来の寺院の姿に帰るためには、寺院の地域社会への開放が唯一の道であり、これによって同時的に住職の生活も貴族的因襲から解放され社会との関係がもてるようになると考えた。

自分の住居や座敷を造る金があつたら社会の家を作れ。

幾枚もの法衣を溜めてゐないで法衣を売って餓えたるものに一杯のコーヒを飲ませよ。仏様は金ぴかにしてもらっても決してよろこばれない。須弥壇の粉飾に用ふる金があったら幼児の心を仏心で莊嚴せよ。私は法域を護る人々にかくの如く呼びかけたいのである。<sup>(9)</sup>

以上のような佐伯の仏教の現代化、その具体的方策としての寺院の開放は、自坊光徳寺を基盤とした社会事業活動Ⅱセツルメントとなつてあらわれる。ならば、何故に寺院の開放がセツルメントへと連動するのかについて、つづいて検討してみよう。

佐伯の構想する社会事業とは、その対象を無産大衆に求め、「彼等の文化を当時の水準に迄たかめ、彼等の生活を輝かしい太陽のもとにもち来たすことは、二十世紀の一等大なる社会事業」<sup>(10)</sup>の目的であるとした。ここでの社会事業は、従来の施与主義的救済より人格的接触主義によつて「無産階級の打ち捨てられた教育の摂取であり、生活の水準に対する理想への自覚」<sup>(11)</sup>を促し、「彼等の苦痛を彼等自身によつて改善せしめ、彼等の自覚が彼等の生活を高め」<sup>(12)</sup>ることになるとした。ここから「社会事業は単なる救済事

業ではなく、自覚運動であり教育運動でなければならぬ<sup>(13)</sup>」という結論を出す。そして、自覚的・教育的運動としての社会事業をセツルメントに求めたのである。このセツルメントについて、基本精神を人格的常時接触に求め、「一切が兄弟となつて、一切が隣人となつて、個人的接触はやがて人類へと進展され、国際的不安をも除去し、相互の和親協同によつて、一層世界文化の水準を高めんとする事、これセツルメント運動の理想」<sup>(14)</sup>であるとした。

佐伯の社会事業・セツルメント思想は以上のように要約することができるが、彼がセツルメントを無産大衆の自覚的・教育的運動として捉えたことは社会教育的側面を重視した結果であると思われる。しかし、このことが国際的不安の除去に貢献するとした点は、論理的飛躍であらう。この欠点は、佐伯のセツルメントにかける並々ならぬ意気込みと理解することもできる。彼のセツルメント思想の形成に大きな影響を与えたのが、一九二五年夏期から翌年の春期にかけての欧米セツルメントの視察旅行であつた。<sup>(15)</sup>この旅行のなかでトインビー・ホールには長期逗留し、事業の詳細を学んでおり、ここから多くの示唆を受けている。

社会事業の真髄としてのセツルメントと寺院との関係について佐伯は以下に示すような点をもって仏教の現代化として寺院のセツルメント化を主張する。その一つとして、寺院は元来セツルメントとして建立され、その活動は両者とも多くの共通点をもっており、寺院建立の趣旨に従ってその任務を真面目に遂行すれば、自然とそれがセツルメント活動となり、理想的な寺院となる。二つに、寺院は住職、寺族、檀徒という人的組織と土地、建物などの物的条件に恵まれており、セツルメントをはじめのに有効であること。三つに、寺院は一般社会に開放されることが当然であり、その方策としてセツルメントが最適であること<sup>(16)</sup>、などを指摘している。

ここに示された寺院とセツルメントとの関係は、やや強引な展開をもち現実的対応性は認められるものの、寺院機能とセツルメントのそれとは共通点が多いものの本質的に異なると理解しなければならぬであろう。寺院のセツルメント化を以上の三点によって主張した彼は、その経営形態として、一つに、寺院自身がセツルメントとして動いていくこと。二つに、他の第三者がセツルメントとして寺院

を利用すること。三つに、寺院と第三者が協力して実行することなどの方法があるとした。そして、佐伯は、第三点が寺院セツルメントには有効であると考え、寺院と地域住民が協同することによって寺院は「共存共栄の道場」として住民に貢献できると確信した。

仏教の現代化、寺院の地域開放、その結論としての寺院のセツルメント化は、以上に述べたような構想であった。佐伯は、この主張を机上の空論として終らせるのではなく、自坊光徳寺において善隣館を開設することによって実践化し具体化させる。ここで注意すべきことは、自坊に善隣館を「付設」するのではなく、寺院それ自体をセツルメント機能の一つとして位置づけている点であり、佐伯自身の身分についても光徳寺住職としての存在と善隣館々長としての立場が、住職・セツラーと同時に一体化する。この点に、佐伯の寺院セツルメントの特色を看取することができ、それは、寺院とセツルメントの実践の統合によって「生まれる前から死ぬまで」<sup>(17)</sup>をモットーとする彼の精神となり、ここに「信仰の力のほとばしる生活」<sup>(18)</sup>が展開する。

## 二、光徳寺善隣館創設・展開の周辺

佐伯にとっては、一九二〇年九月一日の父祐哲の死去により寺院継承問題が現実のものとなった。光徳寺善隣館創設は、一九二一年五月二一日であり、佐伯はまだ仏教大学に在籍していた。創設の前年に父を亡し、翌年に早くも寺院の開放化としてのセツルメントに着手したことになる。この事情から佐伯は、学生時代に仏教の現代化という問題意識とセツルメントに関する関心と知識を持っていたことになる。この間の事情については、今日までの研究では明らかにされておらず、佐伯自身も何ら語っていない。そこでここでは、まず、佐伯が社会事業・セツルメントについて関心を深めていったと考えられる周辺の事情から分析しておく。

光徳寺の旧住所は、大阪府西成郡中津町大字光立寺四六番屋敷といい、大阪市に隣接する位置にあった。当時の中津町それ自体は、労働者街というより、その中心よりやや離れた所に位置していた。すでに周知の如く、一九一八年の米騒動は、大阪市は勿論のことその周辺でも発生しており、

中津町では際立った動きは見られないが、その近隣町村では勃発している。それは、鷺洲町や豊崎町などである。彼の地理的な生活環境が以上のようなところにあったことは、その後の彼の思想や行動に大きな影響を与えたと考えても不自然ではない。少し考察の範囲を広げると労働者の街大阪では早くから労働問題が発生し、資本主義の発展に伴ってそれは激化する。ここにおいて労働者の生活問題に対応して多くの社会事業方策・施設が公私の別なくもつけられた。大正中期以降の大阪社会事業の発展は、林市蔵と小河滋次郎とのコンビでおしすすめられ、多種多様な方策が実施され、大阪社会事業は躍動期にはいる。このなかで、セツルメントについてみると、すでに石井記念館愛染園が一九一七年に設立されており、また光徳寺善隣館とはほぼ時を同じくして、わが国最初の公営セツルメントである大阪市立市民館が創設されている。大正中期以降設立されたセツルメントを掲げると、基督教ミード社会館（一九二三年）、四貫島セツルメント、淀川善隣館（一九二五年）、市岡善隣館（一九二六年）などである。大阪におけるセツルメントも、大正中期より活発化する。以上のような大阪社

会事業の情勢のなかでの光徳寺善隣館の創設であることは、佐伯が社会の動向に対して敏感な眼差をもっていたことを示すものであり、全体の動きのなかでのセツルメントへの着手であったと考える。

さらに、彼が社会事業・セツルメントへの関心を深めていった可能性として仏教大学との関係が考えられる。仏教大学は、大学令発布（一九一八年）を契機に、一九二〇年、単科大学設立を意図して学年制度を廃止して講座制を導入し、事実上、単科大学の内容を整えた。<sup>(19)</sup>この講座のなかに社会学講座を新設して、同年九月同講座に海野幸徳を迎えている。仏教大学において社会事業教育が実質的に展開するのは、この時からであり、勿論、そこでの中心的指導者は海野であった。海野は、社会政策や社会学特殊講義を担当している。彼の社会政策とは、社会事業を中心としたものであり、同特殊講義もすべて国内外の社会事業に関するものであった。<sup>(20)</sup>社会学や社会事業に関する講義には、専攻生は勿論のこと、他専攻生も多く聴講しており、学内においても社会事業への関心を高めていった。佐伯が仏教大学に在籍した時期は、丁度、この時にあたり、このもとで佐

伯が知識面において影響をうけたであろうという仮設が成立する。

以上のような諸条件が、佐伯をして寺院のセツルメント化を推進させる契機となり、光徳寺善隣館の開設となる。そして、同館での事業が本格的に展開する過程において佐伯を物心両面から支えたのが、大阪社会事業を推進していた人々であり、佐伯と光徳寺善隣館について考察する時、この問題は軽視できない。

佐伯ともっとも深い関係をもったのは、志賀志那人である。志賀の大阪社会事業に果たした役割については、すでに先学の研究において明らかにされているところであり、ここでは割愛する。<sup>(21)</sup>佐伯と志賀の出会い、佐伯が光徳寺善隣館を開設して間もない時期に上山善治の紹介によってはじまっている。志賀が館長として勤務する市民館で佐伯がボランティアとしてセツルメント活動を実際に体験することのできたのは、志賀のはからいによるものであった。年齢的にあまりへだたりのない両者は、その後交流を深め、佐伯のよき理解者となる。佐伯は、社会事業の思想や実践においても、この志賀より多大な影響を受けている。志賀

は、クリスチャンであり、彼の社会事業の思想と実践の底流には、キリスト教信仰が存在していたことはよく知られるところである。佐伯との交流によって仏教に対する関心も深めており、両者の関係が表層的なものでなかったことを示している。一九三八年四月八日、四七才で志賀は他界した。大阪社会事業にとつては勿論のこと、師または親友として交際をもった佐伯にとつても大きな損失であつた。同月十一日、北市民館での告別式は仏式で行われ、導師を佐伯が勤めている。

人間関係は、時として思想、信条、政治的・社会的立場を超えて成立することがある。大阪社会事業界での人間関係は、まさに、社会事業という一点で結ばれたそれであり、形式的なセクト論では説明できない。佐伯と志賀の関係も社会事業を媒介として成立した関係であるが、それが、人間の内面的なところまで深まっていっている。しかし、これから紹介する川上貫一との関係は、佐伯・志賀との関係論とは異質のものである。

佐伯と川上との関係の接点をなすものは、佐伯・志賀論同様、社会事業（セツルメント）である。後で詳述する大

阪セツルメント協会の設立に両者が積極的な関わりを持ったことや、大阪社会事業連盟研究部での活動は、徐々に両者の関係を密なるものにしていった。川上は、一九二四年、小河滋次郎に呼ばれ大阪の地を踏み、翌年、大阪府内務部社会課の社会事業主事となり、大阪社会事業の発展に尽力している。社会科学的な視点から社会事業批判を積極的に行う傍ら、反宗教運動の立場から宗教批判もなしている。<sup>(22)</sup> こうした立場にある川上と宗教家である佐伯は、思想

性あるいは立場性において反駁しあうものはあつても共通するものは皆無に等しい。しかしながら、両者の関係は、これらの立場を超えて、人間と人間との関係として存在している。それは、両者が相互に「人間川上」、「人間佐伯」を認めるところに成立する関係である。佐伯は、川上の思想、立場を認めた上で川上の生きざまに共感したのである。それ故に、川上が一九三三年に治安維持法違反で検挙され翌年五月に釈放された後、佐伯は川上を自坊に住ませ、援助している。そして、川上は、光徳寺に住しながら、「悠々と、労働者診療所の仕事をしたり、労農救援会に関係したり、特に当時の『人民戦線』運動をめざして、



『労働雑誌』の関西支局をつくったりした」(23)と後日回顧しており、佐伯は、積極的に川上の運動を支援はしなかったが、それは認めていた。川上が検挙、入獄後も佐伯は面会によく出かけている。こうした佐伯を川上は、「とにかく文字通りの自由人で、あけっぱなしの朗らかな坊さんだった」(24)と評している。

以上のような両者の関係は、佐伯と志賀が相互の関係を深め、双方の思想形式に影響を与え合うものであったことに比して、思想と立場の相違は、どこまでも相違として存在し融合しあうことはないものの、双方がもつ「人間性」に強く共感し合い、双方の立場を認める関係であったといえよう。川上は、佐伯と同様、思想、立場を異にする多くの人々の援助を受けており、それは、彼がもつ人間的魅力に帰因するものである。佐伯もそれを感じたなかの一人であったが、佐伯自身も「自由人・明朗な坊さん」として人間味のある存在であったと考えられる。

志賀や川上のほかに大阪社会事業界のなかで佐伯と特に関係が深かった人物として、さきの弘済館の上山善治、石井記念館愛染園の富田象吉、博愛社の小橋カツエ、淀川善

隣館のS・F・モランなどの諸人物をあげることができ

る。光徳寺善隣館は、一九二一年五月に開設されているものの、佐伯が語っているように、一九二四年頃までは「準備時代」に当り、目立った活動はない。この時期、佐伯は、セツルメントについての構想や市民館での体験的学習を通して光徳寺善隣館の今後を模索している。そして、彼のセツルメントの思想と事業に対して決定的な方向を与えたのが一九二五年から翌年にかけて行った欧米旅行であった。佐伯が訪問した国々は、フランス、イギリス、イタリア、アメリカの諸国であり、滞在の時間の大半を各国のセツルメント見学に費している。とりわけ、ロンドンのトインビー・ホールには、二カ月半の長きにわたって逗留しており、セツラーとして貴重な体験をした。また、同市に存在するセツルメントをすべて見学するなど精力的な行動をとっている。

欧米旅行におけるセツルメント見学によって佐伯が修得したものは、一つに、イギリスの自由主義的な文化とこれにもとづき展開するセツルメント活動であった。活動的な

かで特に感銘を受けているのが文化的活動であり、演劇とか言論を通して自己主張することの重要性を学んでいる。

主義主張が相違しても相手と討究・論争して自己の立場を表現することが日本人には欠如している点を指摘し、今後は、日本人も表現力を修得し、自分の意見が人前で堂々と表明できるようにならなければならないと考えている。それは、文化的領域に限らず社会的にも政治的にも同様であるとした。二つに、イギリスとアメリカとのセツルメントを比較して、日本が参考にするのは前者であるとした。イギリスのセツルメントは、事業においても建物においても自然発生的に一つ一つを積み重ねて充実発展しているが、アメリカのそれは、一定の資本のもとに大組織を作り、そこに多くのセツラーを配しており、この結果、セツルメントの精神である人格的・精神的な気分が前者に比して希薄化している。故に、セツルメントとして適切なものはイギリス流であり、寺院のそれはイギリス流が妥当であるとした。三つに、イギリス、アメリカに限らず、佐伯がセツルメント活動のなかで注視したのは、文化的な活動である。それは、佐伯個人の関心事がそこにあったことによるもの

であるが、先に見たようにセツルメントを文化運動と考える彼の立場からみれば当然のことであろう。このために、セツルメントにおける演劇や音楽活動に対する関心の高さは並々ならぬものがあり、労働者が文化活動により社会的自覚を確保することを彼の構想するセツルメントの支柱にすえた。

### 三、光徳寺善隣館の事業展開

光徳寺善隣館がセツルメントとして本格的に事業を展開するのは、彼が欧米旅行から帰国してから以降のことであり、イギリス流のセツルメントを光徳寺善隣館において実践する。

一九二四年、善隣館での事業を宗教部、社会教育部、社会事業部の三部門にわけ、活動の形式を整え、漸次、説教、講演、幼稚部、乳幼児保育、諸クラブ活動、授産事業等と事業を拡大していく。活動の拠点は善隣館であるが、一九二八年には、郊外の家（カントリーハウス）として豊中の刀根山に一千坪の土地を購入して、労働者や児童などの慰安施設として開放している。

一九三〇年の光徳寺善隣館事業概要を紹介すると、設地坪数二千坪、従事員有給十一人、無給九人、年額経費約六千円と報告されている。事業内容として三部二七種類の多くを開設し、これらのうち出席延人員の高いものをあげてみると、説教（宗教宣布と情操教育）、幼稚園（幼児保育）、螢雪クラブ（小学生学童保育）、図書館、アテネクラブ（中学生学童保護）、夜間裁縫、日曜学校などである。これらの他に注目できる事業項目として政治経済社会などについての特殊講演会、方面事務の取扱い、シューボーイユニオ

ンと称する失業少年を対象とした靴磨きなどの活動もあった。  
一九三六年現在で作成された「光徳寺善隣館要覧」（パンフレット）によれば、「善隣館を利用する人数に於ては一ヶ年延約十万人に達するに及んだ」と記している。従事員も有給十三人、無給三五人というように一九三〇年より大幅に増加しており、事業内容においても年を加えるごとに発展している。参考までに一九三七年度の事業成績表を掲げておく。

# 光徳寺善隣館事業成績（昭和十二年度）

（出典：『光徳寺善隣館事業報告書』昭和十三年四月）

事業種目	会員数	一回平均員	延回数	延人員	附記
講演及講話会		一二二	六〇	七、三八三	
婦人会	一六〇	一一三	一二	一、三五八	婦人ノミノ宗教クラブ
土曜学校	一三五	五三	四七	二、四九九	少年少女ノ宗教々育
図書館		一五	二五五	三、六三五	府立中央図書館ヨリモ配本アリ
諸クラブ		二二	六	一三二	各種研究会等
幼稚部	一〇〇	八三	二五九	二一、二七六	
託児部	五〇	二九	三二四	九、三〇九	

母の会	九七	四七	一二	五六三	幼稚園附属
夜間裁縫部	一五	七	二〇四	一、四四七	昼間勤労者ノ為メ
昼間裁縫部	一〇	五	九四	四六七	
講習会		一三〇	五	六五二	「おやつの作り方」「音楽」「育児」等
螢雪クラブ	一六〇	一五七	三三	五、一八三	学童保護
映画会		二七一	四	一、〇八五	小学生ヲ中心トシタル情操映画教育
方面委員事務				五五〇	現在カード一五
相談指導				三六九	館長及顧問弁護士担当
体操会	五〇	三六	五	一七九	十二月開設、主トシテ主婦
刀根山「山の家」		二二	三一	六七〇	
授産部	五八	四八	三四二	一三、九四九	王冠、印刷物折込
給食部	一二五	九七	二三二	二三、五七五	保育部栄養食ノ給食
運輸部	五〇	二八	二二六	六、一六〇	虚弱児山ノ家及遠距離園児送迎
宿泊保護	八	八	三六五	二、九二〇	セツラー其ノ他
隣人慰安会		五八六	五	二、九二九	町内会、娯楽会、戦捷祝賀会等
歳末無料診療		四四	八	三五五	朝日新聞社会事業団、阪大医学部後援
其他				三四六	
合計				一〇五、九九一	

講演及び講話会のなかで中心となるものは、宗教的な説教であった。佐伯が構想する寺院セツルメントの一つの眼目は、宗教的情操の高揚にあり、同館活動のなかで特に力をそそいでいる。組織のなかに法務係なるものをもうけ、四名の係員は、光徳寺の檀信徒の家々を毎日訪問し、その生活状態や諸問題を発見して、これを館長である佐伯に逐一報告することとしていた。または、檀信徒のみならず、中津地区の貧困家庭の助葬に際しては、方面委員と連絡をとりながら同寺本堂を提供することとしている。こうした活動の経過をみると、セツルメントの一機能として寺院が完全にその事業のなかに吸収されていたことを示す。光徳寺の本堂をはじめとする寺院諸施設は、セツルメントのために社会資源として利用されている。それは、佐伯が主張した寺院開放の具体的な姿といえる。

一九三六年初春に佐賀県社会事業講演会の講師として招かれた佐伯は、「自分の心に最少限度の生活を考えて残りの寺院全部を社会に提供して管理をさして戴く最も良い管理者として一生を終りたいといふ考が湧いて来たならば、座敷も書院も一切のものは社会に今日から提供されるもの

であります」<sup>(25)</sup>と述べているが、光徳寺は、セツルメントのためにすべてが開放された。

つづいて、光徳寺善隣館の財政問題について検討しておく。佐伯の自論は、公営セツルメントに比して私営のそれは経費的に非常に安いものであり、前者が物質的、事務的、機械的、非人間的であるのに対して、後者は、研究的、犠牲的、人道的、人格的、宗教的であるとする。これ故に、前者は経済力を必要とする仕事に適しており、後者は、人格的な小範囲の事業が適当であるとした。事業運営に際しては、私営セツルメントが「人格的小範囲」に限定されたとしても最低の財源を必要とする。

光徳寺善隣館でのこの問題を一九三七年度の決算書によって収支状況を検討する。<sup>(26)</sup>収入は、約七六〇〇円であり、内訳は補助金二二三〇円、事業収入四二九二円、寄付金一〇六五円となる。事業収入が五五パーセントとなり、私営セツルメントは、利用者の負担がなければ運営が困難となることを先の数字は示している。利用者の負担について佐伯は、「金は取らない方が宜いか、取る方が宜いか、是は大体小さい会費を取る方が宜いではないかと思ふ。一つは

それで自分の責任を有たすこと、それに出来れば補助金を増す<sup>(27)</sup>」ようにすることが望ましいとして利用者負担を肯定する。この考えにもとづき光徳寺善隣館では、保育料、託児料、貸室料、諸会費、母の会費、給食費、昼夜裁縫費など応分の料金を徴収している。

年間約七六〇〇円の運営費は、公営セツルメントの一般的ななその約五分の一位にしか当らない。この財政面での不安定さは、事業内容に反映することは当然である。光徳寺善隣館に限らず私営のセツルメントは、経済的負担の大きい事業については敬遠せざるをえず、その負担の少ない社会教化的あるいは文化的事業に重点をおくこととなる。

ついで収入面での補助金についてみると、一九三七年度では、全収入の約三〇パーセントを占めているものの、佐伯は、これが将来において充実することを望んでいる。この内訳は、御下賜金、内務省、大阪府、大阪市、岩崎家、本願寺などがある。内務省と大阪府の補助金は、その後わずかではあるが増加しているものの、収入全体のなかで補助金の占める率は年々低下していつている。一九四一年度について事業収入と補助金の総収入における占率を示すと<sup>(28)</sup>

前者が六六パーセント、後者が二五パーセントとなり、ますます利用者負担が大きくなっていることを示す。それは、佐伯が利用者負担を「小さい会費」を徴収することによって肯定したものの、この「小さい会費」の限界をこえる状況に徐々に近づいていく過程とも受取ることができ

る。  
『光徳寺善隣館六〇年の歩み』（一九八一年）によれば、セツルメント活動のために、寺院の建物や境内はすべて地域住民に開放され、その上、佐伯家の個人財産もすべて投げられたことを記している。すなわち、一九二九年には、光徳寺境内に図書館を建設したのをはじめとして、三二年に、山門にならぶ佐伯家の私有地の借家数軒をとりこわして敷地約六〇坪に二階建ての社会館を設け、さらに、三九一年に、同じく借家を取りこわして母子寮を建て、十二組の母子をここに保護している。こうした、光徳寺善隣館の軌跡のなかに佐伯のセツルメントに対する並々ならぬ情熱を窺い知ることができる。

しかし、佐伯の個人的情熱によって支えられた光徳寺善隣館も戦争と経営難という客観的状況のもとで事業の一部

閉鎖を余儀なくされ、一九四五年六月一日には、中津附近の空襲によって四百年の法燈を護りつづけた光徳寺、それに同寺善隣館も一瞬のうちに灰燼となってしまった。佐伯もこの時重傷をうけ、これが原因して同年九月十五日に四九才で死去している。

#### 四、大阪社会事業と佐伯祐正

つづいて、大阪社会事業のなかでの佐伯の活動について検討する。言及するまでもなく佐伯はセツルメントを通して多くの社会事業家との交友関係をもった。その代表的人物については前述しておいた。佐伯が大阪社会事業界に登場するのは、一九二六年四月二四日のことである。この日、新築して間もない大阪市立の天王寺市民館で大阪社会事業連盟研究部第五分科会（隣保事業）が開催され、「隣保事業と密接に連絡すべき社会事業若くは之に類する事業の種類及其適当なる連絡方法如何」についての協議が行われた後、佐伯が「欧米のセツルメント巡礼」と題して講演を行っている。この内容については『社会事業研究』（第十四巻第七号）で紹介されている。この年は、佐伯が本格

的にセツルメントを開始する時期であり、大阪社会事業界に足跡を印した第一歩である。講演では、欧米旅行におけるセツルメント見学の成果の紹介と、日本のセツルメントの今後の方向性を提起するものであった。

これより以降、佐伯は同連盟研究部の各分科会にもよく出席しており、大阪社会事業連盟幹事や大阪社会事業協会の評議員などの役職にもついている。こうしたことは別に、佐伯が大阪社会事業のなかで実質面において関係した事項を指摘しておきたい。

一九二九年三月六日に開催された大阪社会事業連盟研究部教化部会で「社会事業に於ける寺院利用問題」が協議され、佐伯は、中外日報社の記者三浦大我とともに仏教寺院の社会事業推進者として重要な役割を果している。この協議は、今回だけで結論がでず、同年六月二六日に再度同部会が開かれている。この席上、大阪社会事業連盟として「寺院自体が社会事業を行ふこと、又寺院を解放して他に提供することを希望する」という決議をなしたものの、その具体的方策については委員会で調査検討して成案を作成して後日発表することとした。委員には、寺院関係者とし

て津村別院の本多恵隆、大谷派本願寺の上場顯弘など他数名と一般社会事業家として佐伯や三浦など他数名が各々選出されている。この委員会は討議を数回重ね、同年十二月二六日開催の教化部委員会席上「寺院開放案」<sup>(29)</sup>を提示し、承認をえている。

この主要点は、第一に住職の社会的進出法として、その前提となるべき社会事業の基礎知識を持つこととしていえる。それは、社会学、経済学、文明史、社会政策、社会事業などであり、この知識修得のため関係講演会や講習会への参加、あるいは現場の見学などの必要性を指摘した。そして住職が積極的に方面委員や教化委員として社会事業活動への参加、寺院相互の協力による社会事業団の設立などを提唱した。第二に寺院の建物や境内の利用法については、救貧、防貧、綜合社会事業などの全領域を掲げているが、そのはじめに隣保事業をあげている点から、これが重視されたと考えていい。この案づくりは、佐伯と三浦が中心となり作業がすすめられているが、成案として具体化したものは、佐伯の光徳寺善隣館での活動内容とほぼ一致しており、ここに、この問題に対する佐伯の関わりの強さを

知ることができる。

大阪社会事業のなかで仏教主義に立ったセツルメントは、一九三五年現在、天王寺区の累徳学園、大阪仏教セツルメント、西成区の四恩学園と光徳寺善隣館の四施設であり、キリスト教系セツルメントの九施設より少ない<sup>(30)</sup>。佐伯は、数少ない仏教主義セツルメントの中心的人物であったことは指摘するまでもないが、大阪のセツルメント界においても指導的立場にあったと考えられる。一九二九年、佐伯は、富田象吉、志賀志那人、賀川豊彦、川上貫一、吉田源治郎などの大阪社会事業のリーダーとともに「各セツルメントの連絡、親和、事業促進に協同研究協議」を推進するために大阪セツルメント協会を設立している。同協会の幹事に志賀、吉田、佐伯が当ることとなり、当初の事業として「大阪に於けるセツルメント」を特集して『社会事業研究』誌の第十七巻第五号に掲載した。ここで佐伯は、編集者として自らも「セツルメントとしての寺院」を分担執筆した。佐伯以外の執筆者は、志賀、祝久太郎、田中藤太郎、富田、賀川、モラン、吉田などであった。

一九三八年、日本は、同年発布の国家総動員法により完



全に戦時体制がしかれ、社会事業も徐々に戦時目的にそつた形で厚生事業へと再編される最中、大阪に隣邦孤児愛護会という組織がもうけられた。同会の趣意書<sup>(31)</sup>によれば、今時の大戦が新東亜体制の確立のもとで真の平和を追求しようとする「聖戦」であるとした上で「我等の心と支那の民意とをまず繋ぐことにむかつて、着々歩をすゝめねばならない」と言い、日本と中国との架橋的役割として戦火に喘ぐ支那の孤児を保護することを目的とした組織であることを高々と宣言している。こうした性格は、戦時目的にそつたものであり、同会は在阪の社会事業団体と大阪毎日新聞社会事業が中心となつて組織したものであった。

同会は、一九三九年一月二日、支那の孤児保護のため支しており、この時、佐伯も大阪四天王寺社会部長森田潮応、市立天王寺市民館長前田貞次、四恩学園林文雄らと共にその一団に加わっている。佐伯が渡支に参加したのは、一九二七年八月から約一カ月間支那の各地で社会事業についての視察と講演を行った経験があり、同地についての知識をもっていたことと、同事業に積極的な関係をもつたからである。このあたりの佐伯の思想の変質を検討しなければ

ばならないが、論文の発表もなく今は不明瞭である。今後の課題としておく。渡支に参加した時期、佐伯は、大阪隣保協会の会長の要職についており、大阪社会事業界に欠かすことのできない人物の一人となっている。渡支の結果、三八名の孤児を引率して帰国し、四天王寺悲田院に収容保護している。日支親善事業の美名のもとに行われた同会の事業は、大阪社会事業の戦争協力を示す一材料であり、これに関係した佐伯も、このことに無意識であつたにせよ客観的には、これを支える役割を果たしたことになる。

### むすびにかえて

仏教の現代化という命題を掲げ、その具体的方策として寺院の地域開放Ⅱ寺院のセツルメント化に自らの生命をかけ、思惟し、実践した佐伯祐正の思想と行動、光徳寺善隣館での活動を概観してきた。見るところ、佐伯という人物は、理論家というより行動的な人であつたように思える。そしてこの背景には、佐伯のリベラルな立場があつた。大正デモクラシー期に多感な青年時代を送った彼の思想のなかにこの立場をかいまみることができるものの、これを確

たるものにしたのは、欧米セツルメント視察旅行での諸体験であった。とりわけ、イギリスでの自由主義の体感、彼がトインビー・ホールからセツルメントの在り方を学んだ以上に、その後の佐伯の思想と行動を規定する程に大きな影響力をもった。

今回、こうした佐伯の人物像と光徳寺善隣館について若干の検討を試みたが不十分な資料収集のために仮設的な部分も少なくなく、今後、これらの諸点については実証的検証を加え、その上で佐伯なり光徳寺善隣館についての歴史的評価を下したく考える。そこで、この小論をむすぶにあたって、ここでの検討を通しての課題を示すこととする。

一つに、仏教社会事業（ここでは仏教セツルメント）の存在形態の一つとして、従来の仏教・寺院に対する批判性と改革性があることはこの小論において明示することができたと思う。この立場は、佐伯に限らず仏教社会事業家と称される教団や寺院に属する僧侶の多くの部分に共通する。別稿において検討した、東本願寺社会課主事武内了温の場合の「寺院の社会事業道場」化の主張も前記の立場の系譜にある。<sup>(32)</sup>この場合の問題点は、仏教再生のための社会

事業の利用ということであり、社会事業が「手段化」されることである。これによって、仏教・寺院が再生されたとしても、この結合方式に終始する限りにおいては、社会事業の本質的發展に仏教は寄与できないばかりか、逆に發展を阻害することにもなりかねない。そこで、佐伯の寺院セツルメント、さらに広くいえば、他の仏教社会事業が如上の課題について如何なる視点からそれを克服していったかの検討は、仏教社会事業の存立にかかわる問題としては必要となる。

二つに、仏教社会事業家の主体性にかかわる問題である。実践主体である仏教社会事業家の生命となるものは、仏教信仰である。これは、社会事業着手時において確たるものとして存在している場合もあるが、佐伯に見られる如く、社会に対しての具体的実践を通して内面的に深化されていく場合が多いようである。すなわち、彼は、当初においては、他力信仰という面からみればそれは不十分なものであったが、セツルメントに全身全霊を傾注する過程で「念々に懺悔の内省」に支えられ「現在のよりよい發展と仏界（最上の理想）への旅をつづける」境地に到達してい

る。称名懺悔の立場からセツルメント実践を行うように信仰の深まりを看取する。したがって、社会の現実到我が身を挺することによって信仰の深化をここにみ、仏教信仰が確立したといえる。これは、社会事業実践にとって如何なる意味を持つであろうか。後述するが、筆者は仏教社会事業の相対的独自性を形態に求めるのではなく、それにかかわる主体の問題として仮説する。主体である仏教社会事業家の信仰の質により、社会事業対象に対する「共感」がより一層内面的に感受でき、ここから実践へのエネルギー源が発現され、問題解決への取り組みが展開される。

この場合、社会認識や対象認識が主観的・独善的に行われるのではなく、信仰が基本にあるがゆえに、社会の動向を冷静に分析する科学的知見に対して謙虚な姿勢を堅持できるし、物事に対する真摯な態度も生じてくるものと考ええる。この視点から佐伯の内面的な仏教信仰の質について今一度詳細に検討しなければならぬ課題が出てくる。

三つに、仏教社会事業の独自性をその形態において発見しようとする所論は少なくない。これをたとえ指摘できたとしても実践的意義を如何程呈示できるであろうか。それ

は、あくまでも形式的問題でしかないであろう。社会事業実践の質において仏教社会事業の独自性の呈示こそが必要なのである。この意味から、仏教社会事業史研究は、その歴史の頂点に位置する諸人物（これらの人々は思想においても社会事業実践においても比較的確たるものが明瞭に示されている）の研究だけではなく、地道に実践してきた人々の社会事業実践史が今日必要となってきたといえる。この実践の検討のなから、仏教社会事業家の信仰の質が呈示され、これに規定された実践の独自性が指摘されねばなるまい。

#### 付記

この小論の作成にあたっては、佐伯千代子女史から多くの証言と史料の提供があったものの、これを十分に生かすことができなかった。また、資料収集については、神戸女子大学の木村武夫教授の多大なる協力を賜った。あわせて感謝の意を表する。

#### 注

- (1) 房崎山光徳寺は、本願寺第十一世法主頭如の直弟子佐伯祐西によって一五八〇（大正八）年に建立されている。
- (2) 佐伯祐哲夫婦の間には、文栄・春栄・正栄・祐正・祐三・祐明・祐光の四男三女の子宝に恵まれたが、三男祐明は、十九歳で、四男祐光は、生後四日目で死亡している。

(3) 佐伯祐三の伝記については、最近のものとして、朝日晃

『佐伯祐三―パリに燃えた青春―』NHKブックス・一九八〇年や、朝日晃「佐伯祐三の生涯と芸術」(『現代日本美術全集9・佐伯祐三』集英社・一九七二年)などがある。

(4) 佐伯祐正『宗教と社会事業』頭真学苑出版部・一九三一年「自序」一頁。

(5) 佐伯祐正『前掲書』「自序」一頁。この点について補記すれば、一九二〇(大正九)年九月一日の父祐哲の死去は祐正に動搖を与えたことは勿論であるが、父の死去直前に許された大谷菊枝との結婚問題も祐正のこの期の大きな悩みであった。結婚を許されたものの菊枝は光徳寺に喜んで迎えられていないと思ひ込み、実家である東京に一時帰ることとなり、東京で自殺をはかる。祐正は急いで東京に行き看病しながら菊枝の誤解をとくが、その甲斐なく、一九二〇年九月二十八に他界している(朝日晃「佐伯祐三―パリに燃えた青春」三二頁〜三五頁)。こうした身近な人々の相次ぐ死に直面し、祐正は、人生について、あるいは将来について苦悩したものと考えられる。

(6) (7) 佐伯祐正『前掲書』「自序」二頁〜三頁。

(8) 佐伯祐正「わが信仰と社会事業」(『社会事業研究』第二三卷第一〇号)四六四頁。

(9) 佐伯祐正「前掲書」五六頁。

(10) 佐伯祐正「前掲書」九頁。

(11) (12) (13) 佐伯祐正「前掲書」一〇〜十一頁。

(14) 佐伯祐正「前掲書」二二頁。

(15) 祐正の渡航目的は、セツルメント視察にあったが、それと

一九二三年下旬よりすでに渡欧している弟祐三に対して帰国を促すためであった。それは、祐三の健康がおもわしくないことと、日本からの送金が困難になってきたことなどが理由と考えられている(朝日晃「佐伯祐三―パリに燃えた青春」八五頁)。佐伯祐正に関する先行研究では、祐正渡航の時期を一九二三年とするが、それは祐正『宗教と社会事業』中の「大正十二年の春、巴里にセツルメント大会が開かれる事の通知があった。丁度弟が巴里滞在中でもあり……」(「自序」三頁〜四頁)という文章を無検討のまま引用した結果である。一九二三(大正十二)年の春には、弟祐三に東京美術学校西洋画科を卒業し、国内での活動をつけ、同年十一月下旬に渡欧の旅についている。そして翌年一月上旬にパリに到着している。この点より祐正の先の文章には誤りがあり、弟祐三のパリ滞在は一九二四(大正十三)年以降となる。そこで、もう一つの手掛りとなるのがセツルメント大会であるが、これが国内的なものか不明であり、今回、開催の年月日を明らかにすることができなかった。結果として、佐伯祐三研究に依拠することとなり、パリでの祐三の行動より、彼が兄祐正をマルセイユまで迎えに行った時期が一九二五(大正十四)年七月であること、同年十月下旬ヴェルサイユ宮殿を一緒に見物している行跡などより、祐正の渡航は、一九二五年が確実であると判断した。ちなみに、佐伯兄弟は翌一九二

六年三月に帰国している。

- (16) 佐伯祐正「セツルメントとしての寺院利用」(『社会事業研究』第十七巻第五号) 六三頁。

- (17) 佐伯祐正「前掲書」八四頁。

- (18) 佐伯祐正「前掲書」八七頁。

- (19) 『龍谷大学三百年史』七三五頁。

- (20) 龍谷大学の社会事業教育については、菊地正治・阪野真『日本近代社会事業教育の研究』(相川書房・一九八〇年)において詳述しているので参考にされたし。

- (21) 柴田善守『社会福祉古典叢書8山口正・志賀志那人』の「解説」において「志賀志那人の社会事業思想」と題して論じられている。

- (22) 川上貫一の研究は、永岡正己「川上貫一と大林宗嗣」(日本福祉大学『研究紀要』第五八号・第一分冊)がある。

- (23) 川上貫一『足あと』浪花書店・一九六六年一〇頁。

- (24) 川上貫一『前掲書』一〇一頁。

- (25) 佐伯祐正「寺院と社会事業」(佐賀県社会事業協会『社会時報』第八巻第一号) 三頁

- (26) 「光徳寺善隣館昭和十二年度決算書」(『光徳寺善隣館事業報告書』昭和十三年四月)。

- (27) 佐伯祐正「寺院と社会事業」(『四頁。』)

- (28) 「光徳寺善隣館昭和十六年度決算書」(『光徳寺善隣館事業報告書』昭和十三年四月)。

- (29) 『社会事業研究』第十八巻第一号。

- (30) 当時の大阪市内のセツルメント事情については、大阪市社会部庶務課『社会部報告二一八号・大阪市に於ける隣保事業』(昭和十二年三月)を全面的に参照した。

- (31) 「隣邦孤児愛護会」パンフレットによる。

- (32) 菊地正治「武内了温にみる社会事業観」(『日本仏教社会福祉学会年報』第十五号)を参照されたし。

- (33) 佐伯祐正「わが信仰と社会事業」(『社会事業研究』第二三巻第一〇号) 四六四頁〜四六五頁。

その他の参考文献

- 佐伯祐正「寺院教会の利用更生と善隣運動」(『社会事業研究』第十五巻第二号)

- 佐伯祐正「セツルメント運動と学徒への希望」(『社会事業研究』第十六巻第四号)

- 佐伯祐正「隣保事業としての寺院利用」(『社会事業研究』第十六巻第六号)

- 佐伯祐正「寺院を中心とする社会事業」(『社会事業』第十九巻第二号)